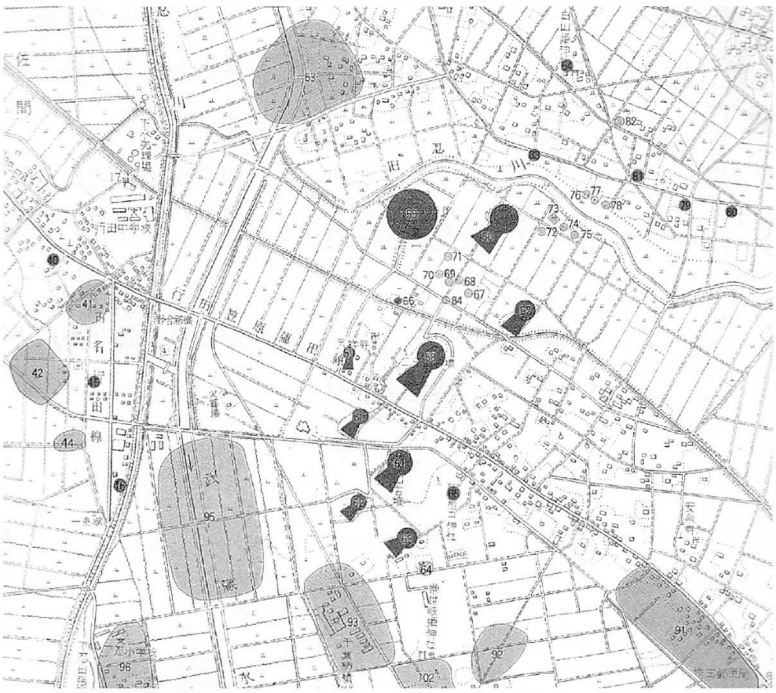
埼玉古墳群陣場地区所在古墳についての覚書

杉　﨑　　茂　樹

はじめに

埼玉古墳群を構成していた元々の古墳の数、そしてその墳形は如何なるものだったのかは北武蔵の古墳時代研究者にとって興味ある事象である。そもそも埼玉古墳群の範囲をどのように考えるかで、その数も変わるわけであるが、一般的には現に大型前方後円墳が残る、二子山古墳を中心に東西約１，０００ｍ、南北約２，０００ｍの範囲の範囲に所在（した）古墳を「埼玉古墳群」と呼んでいる。古墳の数については昭和５５年に刊行された『埼玉稲荷山古墳』（柳田ほか１９８５）で４５基と復元されており、現在もこの数字に変更はない。

周囲に沖積地の多い地域なので、古墳はその埋め立てに格好の採土の標的となって、現在、埼玉古墳群で墳丘の遺存する古墳は二子山古墳など大型前方後円墳８基、そして大型円墳の丸墓山古墳、小型円墳に関しては現存大型古墳の北方に位置する白山古墳など、遺跡地図に示されたとおり、数基にすぎない（第１図濃いアミの表示）。この地図の稲荷山古墳周辺には昭和４３年の発掘調査時の航空写真に写った、削平された円墳周堀のソイルマークやその後発掘調査された情報を元に具体的な位置が示されているが、図の左下にあったとされ、削平されてしまった渡柳地区の古墳については位置表示がされていない。



第１図　埼玉県遺跡地図の埼玉古墳群

遠い将来ではあろうが、古墳公園の拡大整備が計画されているので、現在収集可能な情報により埼玉古墳群分布範囲内の渡柳字陣場地区の湮滅古墳についてその位置等を考えておきたい。

１　古文献・古地図に記録された陣場地区の古墳

古記録に登場する渡柳字陣場地区の古墳について第１表にまとめた。

文献として一番古いのは徳川幕府が文化７年（１８１０年）から文政１１年（１８２８年）まで１９年をかけて編纂した武蔵国の地誌『新編武蔵風土記稿』（以下『風土記稿』・歴史図書社

１９６９）で、次いで明治政府の明治８年（１８７５年）太政官布達により埼玉縣が編纂した県下全域の村誌『武蔵国郡村誌』（以下『郡村誌』・埼玉県立図書館１９５５）である。

いずれにも埼玉郡渡柳村陣場の項に塚の所在記事がある。そもそも「陣場」の地名の由来だが、石田三成の忍城攻めで布陣したとの言い伝えによるもので、『風土記稿』ではその仕寄（足がかり）として塚を多数築いたとあり、もし事実とすれば古墳ではない可能性が生ずることになるが、『郡村誌』ではそのうちの１つに石室の存在が記述されていて、古墳の（おそらくは）横穴式石室の可能性があることになる。『北武八誌』（歴史図書社１９７９）はその筆者が上記２文献の記述を承知して記述したものと思われる。

さて、これらの古墳（あるいは石田三成の築いたといわれる塚の可能性があるが古墳として記述を進める）の具体的位置について検討してみたい。上記文献の文章では推定することは勿論不可能なので、検討するのは以下の資料である。

①『迅速測図』「埼玉縣武蔵国北埼玉郡下忍村」（第２図）

明治政府兵部省参謀本部が明治１６年（１８８３年）１１月作成したフランス式着色式地図。

資　料	制作(記述)年	西暦	陣場地区古墳の記述または状況
『新編武蔵風土記稿』 埼玉郡渡柳村	文政７年	1824	「･･･又此辺に塚九ツアリ　是は石田三成忍城責ノ時渡柳ノ地へ本陣ヲスエ城ニ向テ伏椀ノ如クナル塚多数築キ仕寄トナスト伝ルハ此塚ノコトナリ･･･」
埼玉縣 『武蔵国郡村誌』埼玉郡渡柳村	明治８年	1875	「近傍に数個の小丘あり中央の丘に古松を生やす之を石田冑掛松と云う・・・・又一丘には石宝(室の誤り)あり･･･」
迅速測図 「埼玉縣武蔵国北埼玉郡下忍村」	明治16年	1883	大人塚を含め７基が表示されている。
熊谷法務局公図「渡柳」「佐間」	明治19年頃？	1887	古墳の墳丘と思われる地籍９カ所認められる。
清水雪翁　『北武八誌』	明治40年	1907	「･･･地勢固より高広にして小円丘の古墳十数箇今なお散在すれば是等を以て塁壁に代えしなるべく･･･」「無名塚二渡柳村にあり共に車制にして埼玉村御風呂山に接しこれに次ぐの大墳なり」「漆塚同村陣場にあり車制の小なる者按するに大人塚の訛ならん此外陣場には円丘の陪塚十余あり」
大場磐雄　大正15年の訪問記録 (『楽石雑筆　上』)	大正15年	1925	「渡柳にゆき字陣場に大人塚（車塚小形）及その陪塚二、三(円)を見石器時代の遺跡を探る。何物も得ず。」
柴田常恵　史蹟指定調書	昭和10年	1935	略図に９基、表に破壊年月理由が記載される。
高木豊三郎　『史蹟埼玉』	昭和11年	1936	略地図には９基表示がある。 「大人墳址又漆塚と称す字渡柳陣場の西端忍町佐間との接壌地にあるある前方後円墳で、高さ三米許墳上忍町に同町の火葬場、本村地内に民家がある大正三年墳麓の田より埴輪土偶数点を出す、今小学校内に蔵む。」「陣場の地に散在する小円墳址は、記録に存するもの大人墳址を加え九個ある、其他尚在りしやも知れず、明治の末より大正年間に亘何れも開拓せられ田又は畑となる。」
『埼玉村地図』	昭和12年	1937	公図を元にした埼玉村の地図。地番のほか地目、面積が書いてある。

第１表　文献・地図に現れた渡柳地区の古墳

第２図　迅速図に現れた陣場地区の古墳

縮尺１／２０，０００。日本地図センターから平成１２年（２０００年）復刻版が刊行されている。

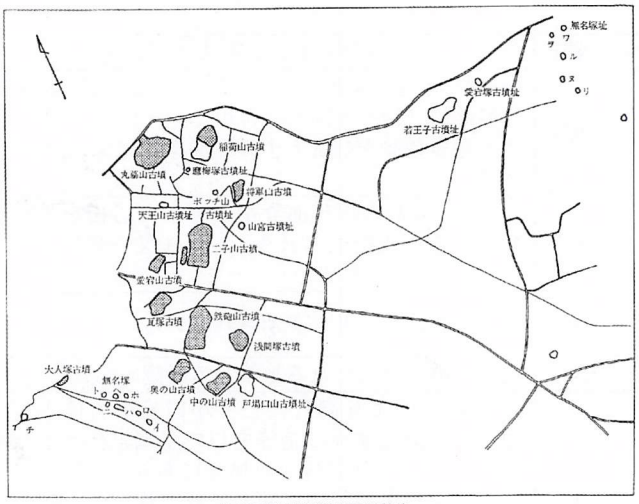
② 熊谷地方法務局の公図　埼玉村「渡柳字陣場」（陣場の誤り）・行田町「佐間字野合」

明治１９年前後に税務台帳作成のため制作された彩色地籍図。縮尺約１／６００。

これを元に作成されたと思われるのが『埼玉村地図』。１９３７年埼玉村地図刊行会作成。地目と面積も書き加えてある。

③『史蹟埼玉』「埼玉村全図」の古墳分布図（高木１９３６）

埼玉古墳群の国指定史跡直前昭和１０年（１９３５）に柴田常恵による古墳群の分布調査の成果を元にしたとされる。このことは『埼玉稲荷山古墳』（柳田ほか１９８５）に収載されていて、同書で柴田常恵の分布調査の成果を窺い知ることができる。



第４図　昭和10年当時の埼玉古墳群

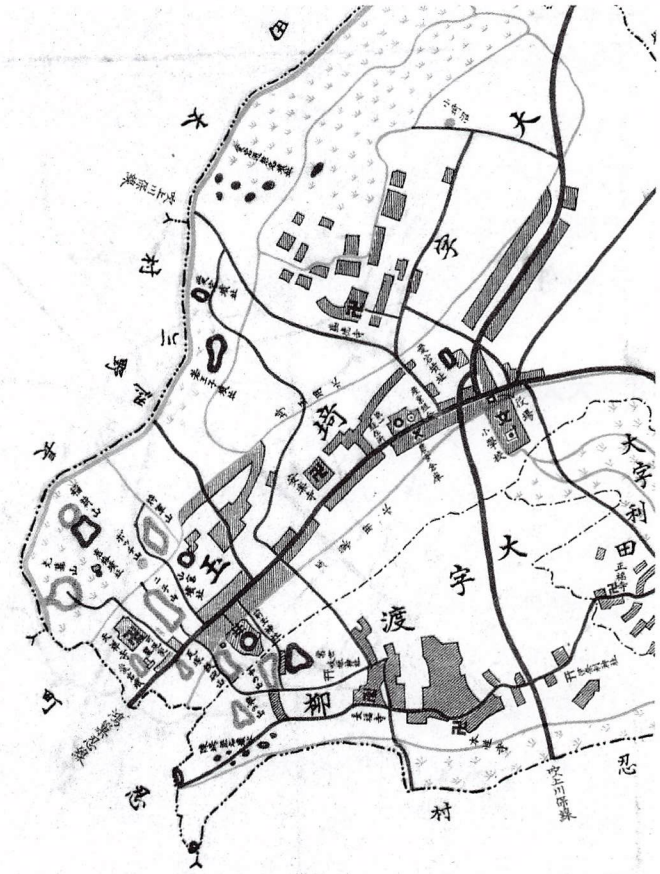
墳名	形状	高さ	横径	長径
丸墓山	円墳	一六米	九六米強	一〇〇米
稲荷山又田山ト称ス	前方後円	後円部九米	五五米強	四五米弱
将軍山	前方後円	後円部三米強	二八米強	九一米
ポッチ山	円墳	二米弱	一一米弱	一五米弱
二子山	前方後円	前方部一一米強 後円部九米～一二米	七六米 一二米	二八米 一二米
愛宕山	前方後円	前方部三米強 後円部三米強	二四米弱	五三米
瓦塚	前方後円	前方部三米弱 後円部三米	三九米弱 三二米弱	六八米
鉄砲山又鉄砲風呂山ト称ス	前方後円	前方部八米強 後円部三米弱	六三米強 五九米強	一〇八米
中の山	前方後円	前方部四米 後円部五米	三六米弱 三四米弱	七二米
奥の山	前方後円	前方部六米弱 後円部五米弱	三七米強 三七米強	六七米
若王子	〃	〃	〃	〃
天王山遺址	丸墓遺	〃	〃	〃
鹿梅塚址	〃	〃	〃	〃
浅間塚址	丸墓遺 高町遺	〇〇・〇六反 〇〇・三六反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反
戸場口山塚址	大字淡柳原	〇〇九八反 〇〇八一反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反
大人塚址	大字後柳陣場	一・〇〇四反 三・〇〇五反	大正二〇年	大正二〇年
無名塚址	〃	〇・七一九反	大正二年	大正八年
イ	〃	〇・二二五反	大正八年	〃
ロ	〃	〇・三〇五反	〃	〃
ハ	〃	〇・四四一反	明治四二年	〃
ニ	〃	〇・二二一反	明治四五年	〃
ホ	〃	〇・一九反	大正八年	〃
ヘ	〃	〇・一〇四反	〃	〃
ト	〃	〇・一〇〇反	明治四五年	〃
チ	〃	〇・〇二〇反	大正八年	〃

墳名	所在地	地目	面積	築造年月	備考
丸墓山	〃	山林	〇・一五九反	〃	〃
稲荷山又田山ト称ス	前方後円	宅地	〇・四一九反	明治末期	〃
将軍山	前方後円	山林	〇・〇一反	〃 中期	開墓田トナス
ポッチ山	円墳	〃	〇・〇六反	〃	〃
二子山	前方後円	宅地	〇・〇四反	明治末期	開墓田トナス
愛宕山	前方後円	宅地	〇・〇四反	〃	〃
瓦塚	前方後円	宅地	〇・〇四反	〃	〃
鉄砲山又鉄砲風呂山ト称ス	前方後円	宅地	〇・〇四反	〃	〃
中の山	前方後円	宅地	〇・〇四反	〃	〃
奥の山	前方後円	宅地	〇・〇四反	〃	〃
若王子	〃	〃	〃	〃	〃
天王山遺址	丸墓遺	宅地	〇・一五九反	〃	〃
鹿梅塚址	〃	宅地	〇・〇一反	〃 中期	開墓田トナス
浅間塚址	丸墓遺 高町遺	宅地 地目	〇〇・〇六反 〇〇・三六反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反	〇〇・〇四反 〇〇・〇四反
戸場口山塚址	大字淡柳原	山林	一・〇〇四反 三・〇〇五反	大正二〇年	開墓宅地トナス
大人塚址	大字後柳陣場	山林	〇・七一九反	大正二年	開墓宅地トナス
無名塚址	〃	〃	〇・二二五反	大正八年	〃
イ	〃	〃	〇・三〇五反	〃	〃
ロ	〃	〃	〇・四四一反	明治四二年	〃
ハ	〃	〃	〇・二二一反	明治四五年	〃
ニ	〃	〃	〇・一九反	大正八年	〃
ホ	〃	〃	〇・一〇四反	〃	〃
ヘ	〃	〃	〇・一〇〇反	明治四五年	〃
ト	〃	〃	〇・〇二〇反	大正八年	〃
チ	〃	〃	〃	〃	〃

第２表　埼玉県北埼玉郡埼玉村古墳群調査表　指定保存之部（左）　記録保存之部（右）

第３図　柴田常恵らによる史蹟指定直前の分布調査による分布図（上）と一覧表（柳田ほか１９８５より）

②の公図の検討の前に、③の資料にあたっておこう。なぜかといえば陣場地区の各古墳の所在の概況の理解にはわかり



九、大人塚址　又塚塚と稱す

大字渡柳陣場の西端忍町佐間との接壌地に在る前方後圓墳で、高三米許墳上忍町地内に同町の火葬場、本村地内に民家がある、大正三年丘麓の田より埴輪土偶數点を出す、今小學校内に藏む。

一〇、陣場の諸小墳址

陣場の地に散在する小圓墳址は、記録に存するもの大人塚を加へ九個ある、其他尚在りしやも知れず、明治の末期より大正年間に亘り何れも開拓せられ田又は畑となる。

新篇武藏風土記稿に云、この邊に塚九つあり、石田三成忍城攻圍の際渡柳の地に本陣を据え城に向つて伏椀の如くなる塚數多築き、仕寄となすと傳ふるは、この塚の事ならん云々。

二七

第６図　史蹟埼玉の陣場地区古墳の分布（上図左下部分）と同書の大人塚古墳と陣場地区小古墳の記述部分（左）

やすい資料だからである。第６図の『史蹟埼玉』収載の図で見ると、奥の山古墳の西方に「陣場無名墳址」として６基、そして大人塚古墳、左下の村境に古墳址表示がある。『史蹟指定調書』の内容は『埼玉稲荷山古墳』で窺い知ることができ、昭和１０年当時の分布図では無名塚が７基、それに大人塚古墳それに南西の村境に１基、都合９基、塚の表示がある。そして各古墳が明治４２年から大正８年までに破壊されたことがわかる。

具体的に位置と状況をつかむのには②の公図は頗る貴重である。渡柳地区の公図を第４図に示す。原図は着色図で、薄黒く見える部分が原図では緑色で山林と表示されていて、古墳の位置とわかる。『史蹟指定調書』（『史蹟埼玉』）に示されたそれぞれの古墳名を矢印で示してみた。

2　小円墳について

無名塚イ～トは道に沿うように分布しているのが気になり、古墳ならば小規模な円墳なのであろうが、あるいは中世の塚の可能性やそれらを三成が忍城攻めの際に土塁に改造したものなのか、これ以上の検討はできない。

無名塚イについては現地にその一部と思われる高まりが農道脇の水田中に遺存しており、埴輪

片が採取できたが、摩滅していて無名塚イに帰属するのかは不明だ。（写真４）

無名塚チについては現在の下忍一里塚のようだ。昭和１０年の『史蹟指定調書』では大正８年に崩された記載がある。調査者が一里塚と気づかぬはずはなく、なぜ故「無名塚」としたのか推定しかねる。一里塚は街道の両側に作られるのが普通で、現在は東側のみ遺存している。（写真２）西側のものは崩されたといわれているが、それがいつのことなのかわからないが、その西側の一里塚のことだろうか。今後の検討課題としておく。

3　大人塚（うしづか）古墳について

次に大人塚古墳について検討してみる。まず、余り聞き慣れぬ名称についてだが、辞書類を紐解くと、「大人（うし）」とは「領有し、支配する人の称。転じて、貴人の尊称。ぬし。師匠・学者の尊称。」（広辞苑）とある。なるほど前方後円墳に相応しい名称といえる。上記『史蹟埼玉』では「漆塚（うるしづか）と称す」と記載がある。『北武八誌』には「漆塚・・・大人塚の訛ならん・・・」とあるので、元々は「大人塚」なのだろう。いつ頃つけられた名前なのかはわからない。

これ以外の文献では大場磐雄の大正１５年の訪問記録が『楽石雑筆　上』（大場磐雄１９７５）にあるが、最も詳しいのは『史蹟埼玉』（高木１９３６）である。昭和１１年の刊行で、この頃までに墳丘が削平されて火葬場や民家になっていたことがわかる。そして、周囲の水田面からの高さであろうが、なお３ｍばかりの墳丘が遺存していたこともわかる。

次に、公図を操作して墳丘規模について検討を加える。字渡柳の公図では半分しか示されていないので、西隣の忍町大字佐間字野合の公図の該当部分をつなぎ合わせて作成したのが第５図１である。佐間地内の部分の該当箇所に「弊馬捨場」、「火葬場」とあり、史蹟埼玉の記述と符合する。

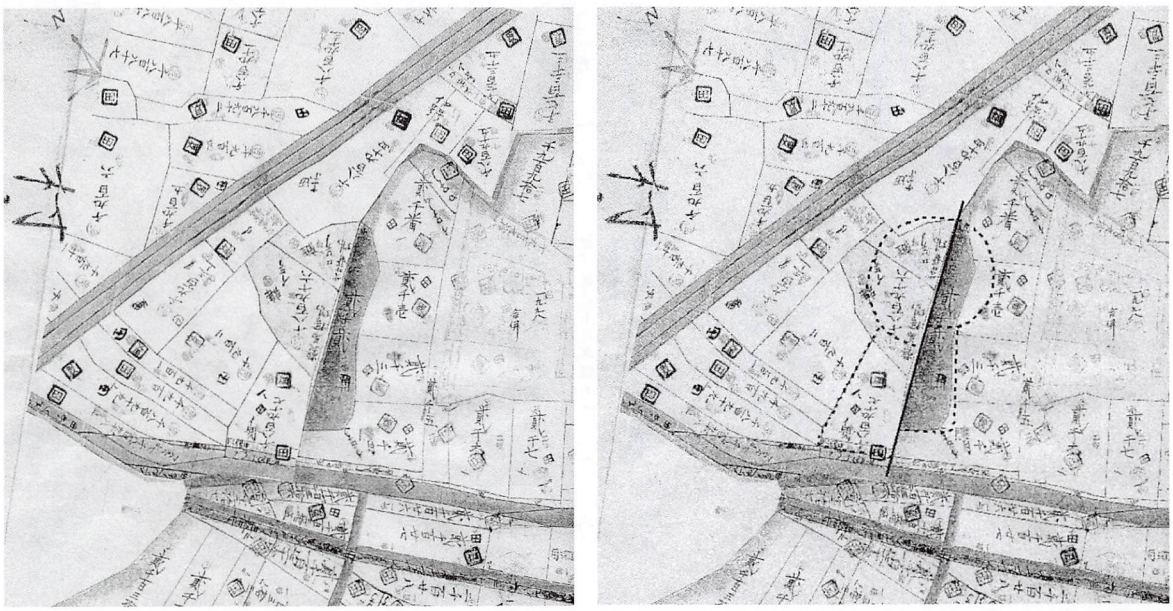
公図の地籍が古墳の前方部や後円部の各箇所に対応したものでない可能性が高いことから、以下の記述は、精度的には低いレベルの話となるので、予めおことわりしておく。

渡柳分の２００２番地が前方後円形の半分の形をしているので、その形から推定してみる。公図の縮尺は約１／６００なので図上で測定すると、主軸長は約４６ｍ、後円部径は約２４ｍ、前方部幅も２４ｍ前後と推定できる。そして東側の２０００番のイ・ロ号、２００１、２００３、２００４のイ号・２・３の地割りを見ると四角い地割りが並んでおり、当然周堀の地割りと思われるのだが、形態は長方形周堀の可能性も考えられる。（第５図２）

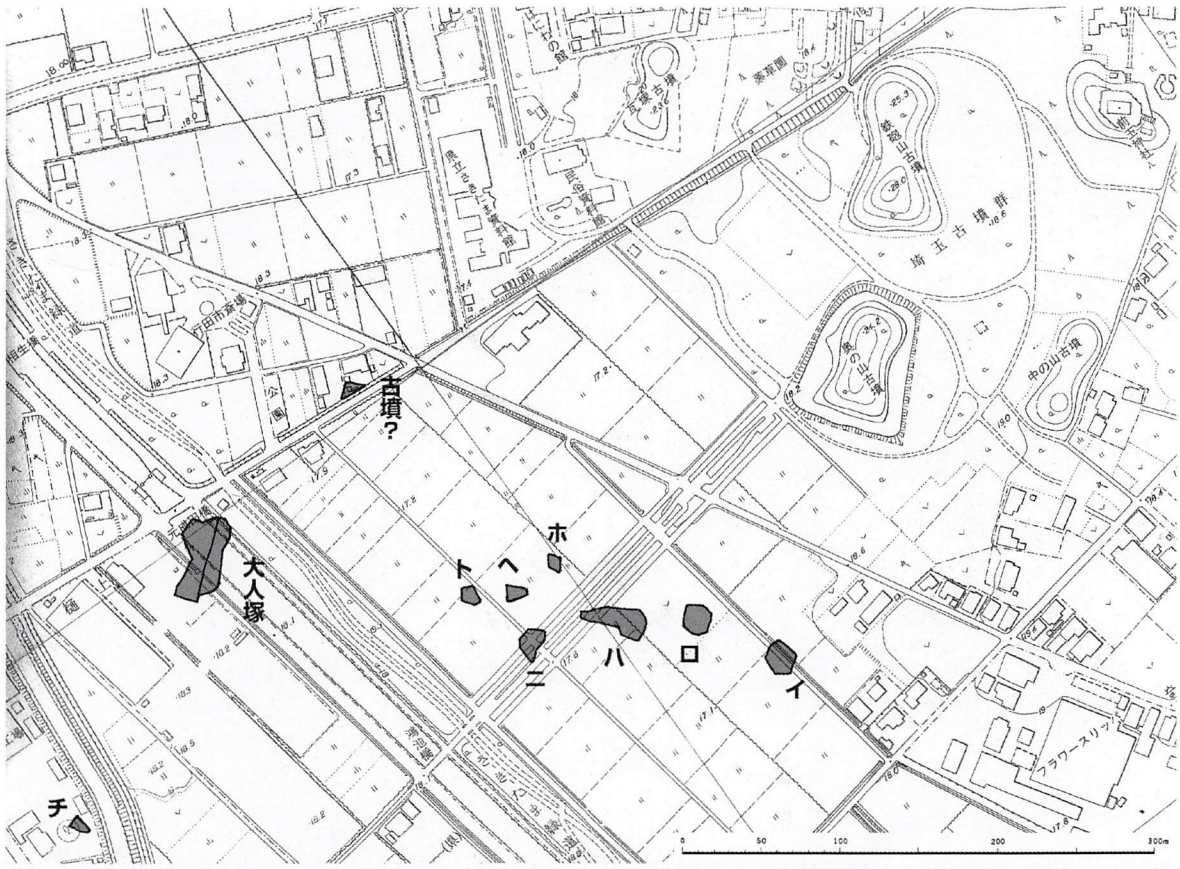
一方、佐間分の１８９６番地のイ・ロ号が後円部の、１８９７番地の１・２・３が前方部の地割りにも見える。そうした場合は主軸長約５３ｍ、後円部径３１ｍ、前方部幅３６ｍ程度に復元できるのだろうが、地割りの形としてはやや不自然なので、渡柳分の東半部による復元のほうが、より実態に近いのではなかろうか。

さて、公図を現状の行田市都市計画図（１／２５００）に縮尺をあわせて落とし込むと、第７図のように所在位置が復元でき、想定主軸の公共座標の南北軸からの振れ角は、Ｎ－約５０°－Ｅとなり、埼玉古墳群中の瓦塚古墳約５２°、奥の山古墳約５４°と近似しており、これらの古墳との親縁性が推定できる。前方部幅は推定するのは困難で、敢えて推定するなら約

第４図　公図に現れた古墳跡（緑色で山林と表示される。）　熊谷地方法務局蔵



第５図　公図中の大人塚古墳（左）とその推定復元（右）



第７図　陣場地区各古墳跡の現況図での測定位置

本村出土の埴輪土偶

(30)

(女)偶土輪埴 (30)

形狀　現存部頭部高一八糎六寸頭頂缺損、眉毛左右別々、眼紡錘形貫孔、鼻三角錐形突起、口紡錘形貫孔、耳圓形貫孔、耳輪なし、頸部なし

出土　大字渡柳大人塚金子伴之助氏寄贈

所在　埼玉小學校

(31)

(男)上　同 (31)

形狀　現存部頭部高一九糎六寸三分、冠帽を被る、眉毛以下總て前に同じ

出土　前同所　寄贈者同上

所在　前同校

(32)

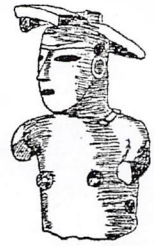
(男)偶土輪埴 (32)

形狀　現存部頭部高一九糎六寸三分)美豆良、眉毛以下　同上

出土　前同所　吉野新三郎氏寄贈

所在　前同校

(33)



(女)上　同 (33)

形狀　頭及胴部高二七糎九寸)髮島田髷の如き結髮、眉左右一直線眼、鼻、口前に同し耳、圓孔下に耳環あり乳房突起

出土　前同所　澤田五郎吉氏寄贈

所在　前同校

(34)

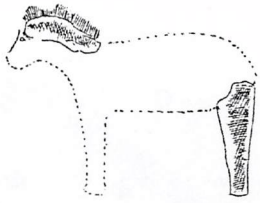
帽冠偶土 (34)

形狀　高一五糎五寸、徑九糎三寸)

出土　大字渡柳大人塚(大正三年四月)

所在　埼玉小學校

(35)



片蹄馬土輪埴 (35)

形狀　脚部　高二八糎九寸三分)

徑七糎二寸三分)

頭部　長二二糎七寸三分)

出土　前同所

所在　前同所

この他土偶上肢の斷片大字渡柳の大人塚奥の山より出土せるもの多數小學校内に藏す。

五九

五八

第８図　『史蹟埼玉』の大人塚古墳出土埴輪説明

２４m前後だろうか？

近年、行田市教育委員会が、武蔵水路の西方で民間事業者の造成地内で後円部・前方部周堀の一部を調査しておりその成果の公表が待たれる。

次に、『史蹟埼玉』に出土埴輪に記述があり行田市郷土博物館に所蔵されているので、紹介しておきたい。（行田市郷土博物館１９９３）

第８図に同書掲載の女子人物２個体、男子人物２個体、人物の冠帽、馬の頭部・脚部を示す。写真５～８はこれに対応する現況写真である。第８図の『史蹟埼玉』の図（３０）に示されている女子は頭頂の島田髷が取れてしまっていて、図より破損が進んでいる。側頭部の耳穴を示す穿孔下に僅かに耳環の剥落痕が認められる。顔面の縦幅は約１２cm、横幅１１．５cmで、色調はやや暗い赤茶褐色を呈している。同じく（３２）は振り分け髪の男子でその頭頂部分以外は脱落しており、角髪も基部より下が破損している。両耳下に耳環の脱落痕がある。色調は淡い黄色みのある褐色をしている。（３３）は島田髷前面に簪の表現のある女子。両側頭部の大きな耳環が印象的である。両腕は上腕部で欠損しており、中実となっている。顔面の縦横とも幅約１１cm。色調は明るくやや黄色みを帯びた褐色を呈している。（３５）の頭部は鬣と頭絡、耳の基部の表現が見て取れる。鬣はＶ字に振り分けられた箇所がある。長さ約２２cm。脚は所在不明である。このほか（３１）・（３３）・（３５）も所在が不明でとなっている。

このほか、上記の行田市教育委員会の確認調査時出土の円筒埴輪も文化財保護課の御厚意で実見させていただいた。完形となれば３～４条の低凸帯の円筒埴輪であろう。暗い茶褐色が特徴的な破片が多い。埼玉古墳群内では鉄砲山古墳や奥の山古墳の円筒埴輪に類似するものがある。これも報告が待たれる資料である。

まとめ

以上、渡柳地区所在の古墳（あるいは塚の可能性もある。）について思いつくままに記述してみた。それぞれ破壊された時期が古く基礎情報も十分でないので、これまで深く追求されなかったのである。今回の作業でも小墳丘の古墳は位置情報が提供ができた程度であるが、周堀は遺存している可能性はあると考えられ、将来の発掘調査の実施で実態の解明を期待したい。

また、大人塚古墳は昭和４０年の武蔵水路の開削時に埴輪出土の情報があるが、現物は伝えられていない。しかし、行田市教育委員会の調査で周堀の位置情報得られており、出土した円筒埴輪から、おぼろげに６世紀後半の築造年代が浮かび上がる。こちらも、今後の公園整備の機会を捉えて、発掘調査が実施され、詳細が明らかになることを期待したい。

なお、行田市郷土博物館及び行田市教育委員会所蔵大人塚古墳資料を郷土博物館塚田学芸係長及び教育委員会文化財保護課中島係長のお取りはからいで実見させていただくとともに発掘調査の成果についてもご教示いただききました。記してお礼申し上げます。

（平成１８年１月）

参考文献

柳田敏司ほか　1985 『埼玉稲荷山古墳』埼玉県教育委員会

高木豊三郎　1932 『史蹟埼玉』埼玉村教育会

大場磐雄　1976 『楽石雑筆　上』雄山閣

埼玉村地図刊行会　1937 『埼玉村地図』（発行日は不明。印刷日は同年１２月と記載がある。）

歴史図書社　1969 『新編武蔵風土記稿７』（明治１７年内務省刊行本の復刻。）

埼玉県立図書館　1955 『武蔵国埼玉郡村誌第１３巻』（明治８年太政官布達により明治政府に提出されたものの復刻。）

行田市郷土博物館　1993 『行田市郷土博物館収蔵資料目録 考古１』

写真１　渡柳地区の現況（県警ヘリコプターによる西からの空撮　平成 17 年７月）

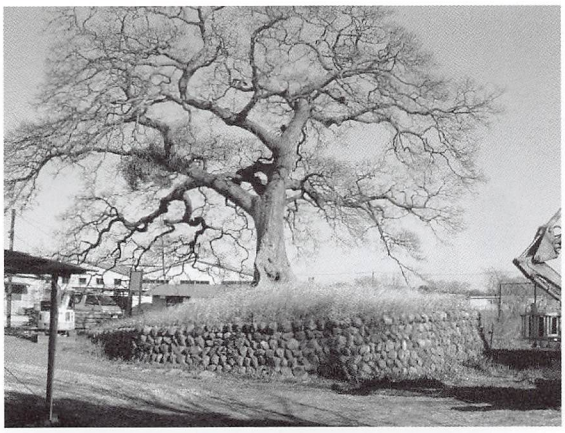


写真２　下忍一里塚
（西から　平成 18 年１月）

写真３　大人塚古墳所在推定地の現況
（南から　平成 18 年１月）

写真４　水田中に残る無名墳イと推定される高まり（南から　平成 18 年１月）

写真５　史蹟埼玉の（30）の埴輪

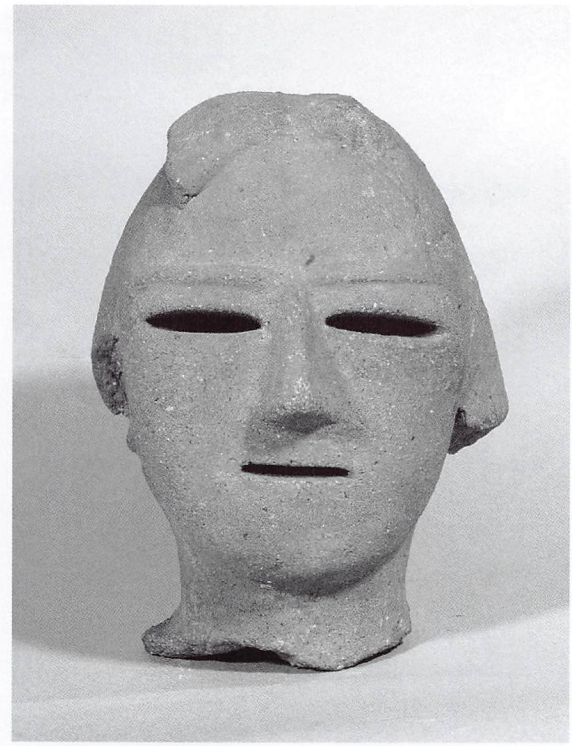


写真６　史蹟埼玉の（32）の埴輪

写真７　史蹟埼玉の（33）の埴輪

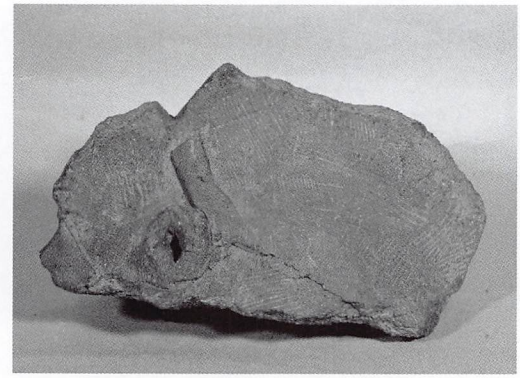


写真８　史蹟埼玉の（35）の埴輪